

「なに、妖龍が卵を産んでいる？」

「はい。といっても無精卵ですけど」

游王こと夏玉は、妖龍に関する報告を受け、首を傾げた。

たびたび洪水を引き起こし、人々を困らせることを道楽としていた妖龍は、先日とうとうこの夏玉によって討たれた。その功績が認められた夏玉は皇帝陛下から「游王」の名を賜り——游州の王として封じられることとなった。

しかし妖龍を哀れに思った游王は、命を奪うことはしなかった。戦いに敗れた妖龍は持てる力全てを使い果たし、歩く気力も失っていた。今は人間の男によく似た姿をしており、再び龍の姿となるには数十年ほどの歳月が必要なのだという。

もはや脅威ではなくなった妖龍は、温情により游王の屋敷の一室でひっそりと暮らしている。

「古い木簡を読み漁ってみたところ、確かに妖龍が抱卵するという記述はよく見られまして。ごく普通なことのようにです」

この報告をしているのは、上官舞という女性である。医術の腕を買われ、妖龍の世話係を務めている。

上官舞は首を傾げながら、話を続けた。

「しかし……普通じゃないのはその頻度ですかね。過去の事例を読む限り、二、三年に一度の抱卵が一般的なようですが、あの妖龍は……。ここのところ、毎月のように未熟な無精卵を産んでいます」

「うーむ……不思議なこともあったものだ。なぜそのようにたくさん産むのだろうか？」

憶測ですが、と上官舞は付け加える。

「あの妖龍は、龍の姿に戻れないほど力を使い果たし、弱りきっています。もしかしたら子孫を残そうという、生存本能によるものかも。それで頻繁に抱卵しているのかと……」

「ふむ。もしそうだとしたら、孵ることのない卵をひたすら産み落としているあの妖龍が、なんだか哀れだな。……………」

游王は茶杯を置き、椅子から立ち上がると、朗らかな口調で言った。

「よし、ひとつ種付けしてやるとするか」

颯爽と部屋を出ていく游王に、上官舞は慌てて声をかける。

「あ、游王。産み落とされた卵はどうしますか？ 龍の

卵だと言えば、領民たちに高く売れるかも……」

「よせ、よせ。なり損なったものと言えど、生命は生命だ。どこか良い場所を占って、きちんと葬ってやりなさい」

「……分かりました」

上官舞はややつまらなさそうな顔をしながらも、大人しく主人の言いつけに従った。

---

游王の屋敷の中で最も風水的条件が良く、最も霊力が集うとされる閑静な一室。そこの扉を開けた瞬間——美しい青年の姿をした妖龍が、キッと游王を睨みつけた。

游王は「睨みつけられるほどには回復したらしい」と安堵し、思わず笑みを溢した。

「貴様っ……何をしに来た……！！」

「妖龍どの。調子はどう……おおっ、本当に腹が大きくなっている。まるで妊婦のようじゃないか」

「……！！」

妖龍は布団で腹を覆い隠したが、游王は親しげに近寄

る。

「たびたび抱卵を繰り返していると聞いたので、様子を見に来たぞ」

「はっ！！ 私の惨めな姿を笑いに来たのか？ 人間とは本当に悪趣味な生き物だ」

「惨め？ まさか。こうして生命を繋ごうとしているだなんて、尊いことではないか。美しいぞ……貴殿と対峙した日を思い出す」

游王が妖龍の腹をそっと撫でる。その甘ったるい手つきに思わず鳥肌が立ち、妖龍は「ひっ」という小さな悲鳴を上げた。

「こんなところに閉じ込めてすまぬとは思っているが、これも領民たちのため、仕方がないことなのだ。許してくれ。お詫びと言ってはなんだが、今日はこの腹の卵たちに種付けしてやりに来た」

「……………は？？ え？ 今、なんてっ…………」

「気付いてやるのが遅くなりすまない。ひとつ残らず、念入りな種付けをしてやろう。全て貴殿と私の子として孵るように…………」

妖龍が固まっている間に、游王は己の衣をてきぱきと脱ぎ捨てていく。

ぼろんっ、と勢いよく飛び出した赤黒い怒張を見た瞬

間、妖龍はようやくこれが悪い夢ではなく現実であることに気がつき、顔を青白くした。

「ひいっ……！！ な、な、なぜもう昂っている……！???」

妖龍が見つめれば見つめるほど、その怒張は誇らしげにそそり立っていく。

これから遂げるであろう本懐を想像し——子種をグツグツと煮えたぎらせた游王が、呼吸を荒くして妖龍の身体に迫る。

「いや、よくよく考えてみれば、この状況はかなり良いと思ひ、興奮してきた」

「なっ、なななな、なんなんだ貴様はっ……！？ 気でも触れているのか！??」

「ずっと気がかりだったのだ。民を脅かす妖龍と言えど、力で屈服させるような退治の仕方では良かったのだろうか。話し合いで解決はできなかったのだろうか、と……」

「ふん、今更なんの戯言を……」

「しかし、貴殿が私の子を産めば、後世の人々はどう感じるだろうか？」

「?? どうって……何が……」

妖龍の膨らんだ腹を、ねっとりと、愛おしそうにさす

りながら游王は答える。

「きっと心が通じ合った——愛し合ったのだと思うだろう。種族の差を超えた情が芽生え……妖龍は愛の前に心を入れ替え、悪さをやめ、仲睦まじく暮らしたと……。後世の我々はそのような伝説になる。ああ、なんと美しい……」

「ひいいっ……………!!! 全然美しくないっ!!! ついでにその美しくないモノも仕舞えっ……………!!!」

妖龍の抵抗もお構いなしに、游王は衣を剥ぎ取っていく。妖龍の下半身が雌雄同体であるという事実が曝け出される。しっとりとした熱を帯びた雄の部分と、真っ赤に充血した雌の部分。

游王は後者の割れ目に、容赦なく指を挿れ、ぐちゅぐちゅと掻き回し始めた。

「卵がある場所はここか？ この奥だな？」

「ひいっ!! や、やめ、触れるなっ……♡」

「ふむ、この中の卵に精液をかけてやればよいのだな」

「おおおおおッッ……♡♡♡ らめ……ッ♡♡♡♡」

抱卵した妖龍の内部はいつでも雄を受け入れられるよう、四六時中とろとろの蜜で満たされている。本人の意思に反して、身体の方は雄の子種を今か今かと待ち侘びていた。

「ひいっ！！！！だ、だめっ、駄目だっ♡♡ 貴様にだけは……絶対になんか、種付けされたくないっ！！私をこんな目に遭わせた、貴様の子を産むなど……」

膣壁を指でぐねぐねと擦る。妖龍はこんなささやかな前戯にも耐えることができず、派手に仰け反り咆哮した。

「~~~~~っオおおおッッ！！♡♡♡」

中の準備が万端であることを理解した游王は、パンパンに膨れ上がった己の怒張を妖龍の入り口に充てがった。

「だ、だめだめだめ、だめっ、や……」

「さあ……妖龍よ。私のものとなった証を孕んで、この世に産み落とすがいい♡」